# 令和３年度第１回富山市総合教育会議　会議録

**１　日　　時**　令和３年８月１１日（水曜日）

午前　１０時開会

午前　１１時５分　閉会

**２　場　　所**　本庁８階大会議室

**３　出 席 者**　富山市長　　藤　井　裕　久

富山市教育委員会

教 育 長　　宮　口　克　志

委　　員　　若　林　啓　介

委　　員　　藤　井　久　丈

委　　員　　尾　畑　納　子

委　　員　　高　田　　健

事務局関係

教育委員会事務局

事務局長　　金　山　　靖

事務局次長（総務・社会教育担当）　　山　本　貴　俊

事務局次長（学校教育担当）　　大久保　秀　俊

教育総務課長　　石　黒　健　一

学校再編推進課長　　関　谷　雄　一

学校施設課長　　井　上　剛　秀

学校教育課長　　竹　脇　孝　志

学校保健課長　　宮　前　　仁

| | |
|---|---|
| 生涯学習課長 | 高　橋　祐　子 |
| 教育センター所長 | 川　端　紀代美 |
| 教育総務課主幹 | 大　島　　聡 |
| 教育総務課長代理（管理係長） | 余　川　　毅 |
| 教育総務課主査 | 宮　森　知　佳 |
| 企画管理部 | |
| 企画調整課長 | 刑　部　博　規 |
| 企画調整課主幹 | 岸　　聡　之 |

## ４　議 題 等

（１）　議題１　「市立小・中学校再編計画の考え方（案)」について

議題２　「ＧＩＧＡスクール構想の推進」について

（２）　報告事項１「牛乳に起因する集団食中毒の対応」について

## ５　会議の要旨

**○開会**

**○市長あいさつ**

**○議題１　「市立小・中学校再編計画の考え方（案)」について**

学校再編推進課から、下記の点について説明を行った。

・これまでの経緯と再編素案検討のプロセスについて（資料１ページ～２ページ)

・「子どもと学校、地域の未来を育むワークショップ」の中間報告（資料３ページ)

**○意見交換**

【藤井市長】

金山事務局長からも補足をいただたが、私もワークショップに参加してみて感じたのは、まず、自分らの地域を学校中心に考えてもらういい機会だったのではないかと思った。皆さんそれぞれ地域思いの方ばかりで、一生懸命将来のことをみんなで話し合っておられる姿が印象的だった。

ただ、１つ懸念しているのは、年度末に示す市の再編計画案が、そのまま計画案として採用されてくるのではないかということを心配している方が多いということ。決してそうではなく、これがスタートラインで、今後それをたたき台にして、さらに地域の方々、あるいは必要があれば児童生徒さんの声も聞きながら、進めていくというのが今後の進め方だと思っている。そういう観点からもまた皆さんの御意見を聞かせてほしい。

それでは、ただいまの件について、何か御意見があればお聞かせいただきたい。

【若林委員】

現在の状況を見れば、再編はやらなければいけない状況。可及的速やかに前進をしていかなければいけない案件だと思う。特に、複式学級になっている学校については、子どもたちに公平で適切な教育環境が提供できているかという問題もある。もちろん小規模校のメリットもあるが、デメリットがメリットを相当分上回ってくるということから、やはり早く進めていかなければいけない。

それからもう一つ、現在問題になっている教員の働き方改革との関係について。これは、地域コミュニティーとの関わり方等とも併せて、この機会に少し見直しをする必要があるのではないのか考える。優秀な教員の確保といった観点からも、この機会にぜひ働き方改革へも御配慮いただきたい。

【藤井委員】

小中学校再編をどのようにまとめていくかという話の中で、１４の地域生活圏とある。その地域生活圏というものをしっかりと見据えていくことは、これ

から必要ではないかと思う。例えば、私の分野でも地域包括ケアというものがある。これは、もともとの生活圏の中で、住み慣れた地域で過ごすということだが、その生活圏はどこかということになると、これは中学校区で考えたりする。ところが、中学校自体がそこでいいのかどうなのかということが問われる。もともと、その地域の児童の人口や家族の人口が確実な場合はそれでよかったが、今までのエリアだけで考えるということはなかなか難しい。その地域がこれからどうなるか、これは、まちづくり等とも関係してくる。ＳＤＧｓではないが、その地域が持続していくためには、その地域の動向がどうなるかということを科学的に見ていく必要があるのではないかと思っている。

例えば、時代によって行動範囲というのがどんどん変わっていく。大きなショッピングセンターができると、少し距離があっても、人々は何となくそこに通うということがある。そのため人口の分布も、将来的にその土地がどうなるかで変わる。それからもっと言うと、これから働き手が少なくなる時代となっていくため、先生方が集まりやすい場所はどこなのか、こんなことも考えていくことが必要だろう。

そうすると、今、ひとまずは１４の地域生活圏と分けて考えているが、今後の流れというものが、何か科学的に分析できれば、それを考慮した地域生活圏、そしてまた将来像の中での統合や、それから新しく建物を建てるということも考えていく必要があるのではないかなと思う。

例えば、私どもが教育委員として見学に行った品川区の学校も、巨大な地域の中に小学校・中学校があり、そこを中心に町の様々な施設があった。さらに、その地域にマンション等がたくさん出来上がっていく。そういったことを想定して造ったものだと思う。そう考えると、富山市としてどう発展していくかということを見据えた中での地域生活圏ということを考えていくことが大切で、これはすぐに結論が出るものではないと思うが、将来の市の計画等も含めて考えていただきたい。

それとともに、今度はそこから外れた場合どうなるか。中山間地をどうするか。ということも、別な次元から、全体としての生活圏の見直しや再考が今後必要ではないかと思っている。

【尾畑委員】

合併前の市町村をどのように考えていくのかという点が、今までとは少し方向性が変わるのかなと期待しているところである。大きな富山市の中で、災害や自然環境等を総合的に考えながら、それぞれの拠点をしっかりと作っていき、その中に、教育機関というものを位置づけていってほしいと思う。

また、情報インフラや教育のスマート化ということを考えながら、多少の距離があっても情報技術をうまく使いながら、しっかりと学べる新たな教育環境を作っていけるよう考えていく必要があるのではないかと思う。「１４の生活圏」とあるが、それぞれの地域を守っていきながらも、過疎の部分についてどのようにしていくのかということも含め、今までと同じような見方ではなく、新たな教育の手法を使いながら検討していくことも大事なのではないかと思う。

保護者としては、ある一定のレベルの数の児童がいた方がいいということもあり、児童数が多いところに移動してしまうということが十分懸念される。そこで、そこにいても十分充実した教育が受けられるという、そういう視点がぜひ欲しいなと思っている。

【高田委員】

若林委員からも発言があったが、やはり再編は富山市で進めていかなければならないことだと思う。小規模校や大規模校、それぞれにいい点、悪い点があると思うが、極力適正規模になるように再編は進めていかなければいけないと考えている。

ワークショップの参加者を見ていると、小中学生の子どもを持っているであろう３０代、４０代の方も多いが、６０代、７０代の方が多く参加されている。そういった方たちにとっては、地元の小学校を残したいという意見もあるとは思うが、まずは子どもたちにとって何が一番適切かということを考えながら再編は進めていかなければいけないと思っている。

２校または３校以上での再編も検討するとなっているが、そうなった時、通学が大変になる生徒もいると思う。そういった児童が通学しやすいよう、通学のバスを出すことも必要になる。また、１つの校区においても、通学路に危険な箇所があると思う。それが、再編することによって、もっと多くなってくる

ことが想像されるため、子どもたちが安全に通学できるよう、そういった整備もしなくてはいけないと思う。

あと、ワークショップの中での参加者の意見にもあったが、学校跡地の利用についてだが、何かあったときの避難場所として、学校は大事な場所だと思う。ただ、こういったコロナもある中で、今の学校だと、避難してもプライバシーが守られないとか、大部屋にみんな放り込まれて感染の防止ができないということもあるので、そういったことも考慮しながら跡地を整備していくことを考えていかなければならないと思う。

【宮口教育長】

今ほど各委員さんからいただいた御意見、まちづくり・地域づくり・その地域の拠点という考え方については、確かに重要な点だと思う。それと子どもたちの教育環境をどう整えていくかということとのマッチングが非常に大切になってくる。そこで、総合教育会議を開催し、市長とも議論できるいい機会だと思っている。

そういったことを踏まえつつも、教育の質をどう確保するか、高めていくかということが教育委員会の使命だと思っている。

子どもの数が少なくなって、思うような教育ができないという状況に至ってからどうしようかでは遅い。過去の再編の経緯や実績を見ても、５年、１０年、１５年という長いスパンを経て、統合再編がなされてきている。将来を見据えて、どういうことを考えていけばいいのかということを、今から議論していかなければならない。「子どもの数が減ってから対応していては遅い」ということで、今このような取り組みをしているということについて、地域の皆さんにしっかりと御理解をいただきたいと思っている。

具体的には、資料１ページの右下の参考のように、再編対象校が赤字で記載してあり、単級、複式を持っている学校が挙がっている。しかし、その赤字の学校同士がくっついても適正規模にならないということがある。そこで、例えば富山中央でいえば柳町とどこが一緒になれば適正規模になり、子どもたちの通学が非常にスムーズになるのかということを、複数案考えていくことになるかと思っている。

そういったものを皆さんにお示ししながら、そして、地域の実情を勘案しながら、どういう方向で進めていくのかということを、議論しながら決めていくということになる。私ども、市長からも話があったが、今は計画のスタートラインであって、議論を本格的に開始するきっかけとなればいいのかなと思っている。

尾畑委員からもあったが、全ての学校を何が何でも再編して統合しましょうという考え方を、教育委員会は持っているわけではない。通学距離や、地域の特性ということも十分考えながら、その結果、ごくごく小規模な学校を残さなければいけないとなった時に、今課題となっている、大人数でいろんな意見を出し合いながら議論をするとか、切磋琢磨するという環境をどう整えていくかということを、これまで行われてきた教育のようにやるだけには、とてもそれは実現しないので、ソフトの面、教育の在り方ということも含めて、今はまだ言えませんけれども、水面下で様々な検討もしており、一部の学校で実践をしてもらっているところでもある。そういったことも並行してやりながら、一定規模・大規模・小規模、それぞれの良さをどう活かしながら、多様な教育の質をどう確保していくかということを、我々はしっかり取り組んでいかなければならない。

あわせて、市長部局の他部局との連携もしっかりと進めていきたい。教育の本筋ではないが、そういったことも地域の皆さんの要望として出てきていると思っているので、教育委員会としてできることは精一杯取り組んでいきたいと思っている。

【藤井市長】

その地域がどうなっていくべきかという将来像をしっかり見据えて、その中心にあるのが小中学校だという観点。地域の将来像を併せ持つ観点、あるいは、なるべく現在あるものに併設していきたいということで、跡地利用をどうするかという防災上の観点、また、今のＩＣＴなどを活用して、どういうふうに教育格差、情報の格差をなくしていくのかということも含めて、それを利用する観点、あるいは先生方の働き方改革の観点等々、様々な意見をいただいたので、十分に参考にさせてもらい、また市長部局としても取り組めるところは取り組

んでいきたいと思う。

**○議題２　「ＧＩＧＡスクール構想の推進」について**

教育センター所長から、端末の利活用の現状や今後の課題について説明を行った。

**○意見交換**

【藤井市長】

私も小学校、中学校の授業の様子を何回か見学させてもらい、学校の先生の生の声を聞いた。児童生徒は、授業で端末を利用することによって、集中力が高まるという効果はあるとのこと。

それと、どういうところが間違ったか、正解だったか、またそれに対する感想を、今まで１人ずつ発表していたが、今は全員分の感想が端末を通じて共有できる。また、クラウド上にストックしていくことができる。データがストックされることによって、個人個人の学習の進捗度が本人にとっても非常によく分かるし、先生にとっても指導しやすいということがあるとのこと。いい面は、そういうところがある。

もう一つは、学校の先生より、児童生徒の方がさくさくと使うという場面も見られた。本来、先生の負担が軽くなるところだが、先生方の理解や習熟が進むまでは、学校の先生にとって多少の負担感があるように見受けられた。

市長部局としては、ハード整備について、何年かに１回、大きな額の更新が必要ということで、教育にお金をかけるということは決して悪いことではないので、しっかりとそれに対応できるように進めていかなければならないなと考えている。

あと、どうしてもＩＣＴ教材を使うときに、通信等の環境整備にお金がかかる。そういう部分は、教育委員会からお聞きしてしっかり整えていかなければ

ならない。一気に使うとフリーズしてしまうとかダウンするということが事例として幾つか出ているため、そういうことにも、スピード感を持って対応していきたい。

【若林委員】

ちょっと先の話だが、学習者用のデジタル教科書の導入というのは、令和６年度、２０２５年の４月１日から導入するということで文科省は方針を出しているようであるが、具体的には、全面的にデジタル教科書に移行するのか。あるいは紙の教科書を主に使用し、デジタルを副で使っていくのか。あるいは、その選択肢を、県や市町村の教育委員会に委ねるのか等、幾つか導入の方法をまだ検討されているようだが、そこで１つ気になるのは、果たしてデジタル教科書で学ぶことが本当にいいのかどうなのかということ。特に、脳科学的な検証が十分なされていないような気がして仕方ない。

自分のことで考えると、ワープロを使うようになって漢字が書けなくなってしまっている。あるいは、暗算能力が非常に落ちている。スマホを出してすぐ計算機が使えてしまうので、自分の頭で計算するというということがなくなってしまっているという問題がある。あるいは、メモを取るとき、手書きのメモのほうが記憶の定着力がいいということをおっしゃっている脳科学者も出てきている。そこのところは、我々が文科省に対して発信していく必要もあるかもしれないし、もう少し慎重に考えたほうがいいのではないかと思う。

また、韓国やフィンランドのような先進的にデジタル教科書を導入したところでは、かなり問題が出てきていると聞く。要するに、分かったつもりになってどんどん先へ進んでしまっているが、結果的には理解できていない等、その辺については、少し考えていく必要があるのではないか。

ＧＩＧＡスクール構想という動きが、特にコロナの影響で加速されたというのは、私は大変良いことだとは思う。ただ、現状はハードウエアを一応整えた形になっているが、使っていく中で様々な不具合が出てくると思う。これに対しても、先ほど市長もおっしゃったように、迅速に対応していくような努力を重ねていく必要があると思う。

【藤井委員】

今の若林委員と同じようなことだが、まずＩＣＴ導入ということは非常にいいことだと思っている。ＩＣＴ導入によって、いつも同じ人が意見を言うのではなく、みんな同じように平等に意見を出し合えるような雰囲気もある。その反面、先ほどもあったが、何か文章を書くときに、最近は比較的ｉＰｈｏｎｅ等で漢字を探しながら、書くようになってしまっている。やはり、時間をかけてもいいから自分で考えるということがなくなってしまったり、何となく思いつきで調べて、自分でも分からないうちに答えが得られてしまうということもある。今後は、ＩＣＴ教育をやっていくうちに様々な問題点が出てきて、それに対して別の教育もプラスしなければならないということも出てくると思う。富山市も、ＩＣＴを進めると同時に、逆に何かゆっくり考える時間や、瞑想するような時間が必要になってくるかもしれない。そのうちに簡単な計算もできなくてお釣りも分からない、辞書の引き方も分からないという時代になってしまう。何となく雰囲気で図書館の背表紙を見て、「この本を読んでみよう」ということもなくなってくる。そうなってしまうと困るので、今までの教育のいい部分を残しつつ、そこにＩＣＴ教育を取り入れる等、何か方法を考えておいたほうがいいのかなと思う。

自分でゆっくり考える。みんなと一緒に生のやりとりをする。そういうことがＩＣＴ教育を取り入れた中でもできるようになればいいのではないかなと考えている。

【尾畑委員】

昨年、教師としてＺｏｏｍで授業を体験した立場から申し上げると、遠くの人の話を聞く等、色々な良い点もあるが、体験型の授業、あるいは技能的なものは、実際に会ってやらなければならないことから、やはりリアルな授業のよさはあると感じている。宮口教育長は、教育の質を高めたいというお考えから、「フェース・ツー・フェースじゃないとできないことがある」ということをよくおっしゃっておられるが、私もそのとおりだなと思っている。この辺は、教育の専門家の先生方に、それぞれの良いところをうまく精査しながら、より良い方法を考えていただきたいなと思う。

先ほど、若林委員から先生方の働き方改革という発言があったが、私も、例えば１５０人ぐらいの授業をやったときに、様々な質問をオンライン上で書かせる。それを、表ソフトを使うことで、すぐに集計ができる。これは、一人ひとりの子どもたちの筆跡等を見ながら、どういう心情なのかということを見ることはできないが、集計したり等の作業については非常に効率がいい。だから、先生方の働き方という意味では、ＩＣＴの導入はいいのかなと思う。全てが良いかどうか分からないが、上手に使ってもらいたい。

【高田委員】

先ほどは市長、今、尾畑委員からもあったが、先生にとっても子どもたちの意見が見やすい等、指導しやすくなる点では、いいところもあると思う。また、子どもたちにとっても、教育の１つのツールとして効果的に使ってもらえばいいのかなと思っている。

令和３年度の目標として「端末に慣れる」ということで、子どもたちが家庭に端末を持ち帰ってということだが、うちも小学生の子どもが２人端末を持ち帰ってきている。うちは、子どもたちにゲームを持たせているが、それには一応時間制限をかけていて、その時間が来たらゲームができなくなる。そうすると、子どもたちは次に何をするかというと、学校から借りてきたパソコンを開いてユーチューブを見だす。

うちの場合は、妻が専業主婦なので家に大体いるので、注意はする。もしこれが共働きで、子どもたちだけが夏休みに家にいるということになると、もしかすると、ずっとそういうことをしている可能性もあり得る。もしできるのであれば、休みの日は時間制限をかける等の対策もしてほしいなと思う。

正直、子どもたちは、私たちよりタブレットやスマホの使い方は格段に上なので、そういう意味では端末にはもう慣れていると思う。そのため、あまりやり過ぎないようなことも、頭の片隅に入れていただければと思う。

【宮口教育長】

まず、尾畑委員からも言っていただいたが、従来から教育の基本というのは、まさにフェース・ツー・フェースということ、そして子ども同士の直接の関わ

りということが、人間形成・人格の形成という面で本当に重要な部分だと思っている。

それから、学力の定着ということに関しても、若林委員がおっしゃったように、紙の良さということが重要だと思っている。手書きをすることがなくなったことで定着力が低いというデータも様々示されている。

ＩＣＴというと、それが非常に良いように思われるが、一方で、従来行われてきていたフェース・ツー・フェース、人と人との生の関わりであるとか、手書き、紙で物を見たり書いたりということに立ち返りながら、この端末をどう使っていけばいいのか考えなければならない。まさに、年度末に一気にこの問題が入って、学校も手探りの状態でやっている。私どもも先進事例を視察したり、大学の先生からアドバイスをいただいたりしているところだが、情報収集・情報提供を学校にしていきながら、よりよい成果が上がるものを一緒に考えていきたい。

あわせて、数年前は、情報モラル講座を中学１年生でやっていたのを、現在は小学校５年生に引き下げたところだが、これについては、低学年のうちからもっとやっていかなければならない状況・環境に来ているのではないか、ということで、出前講座に合わせて、学校の先生方もきちんと指導できるようにしていかなければならない。加えて、保護者の皆さん、市Ｐ連の方たちとの協力も欠かせないと思っている。協力依頼をしながら、子どもたちが被害者にも、知らないうちに加害者にもならないように、しっかりと指導していく必要があると思う。ＩＣＴの光の部分と影の部分、その両方をしっかりと踏まえながら指導体制を構築していく必要があると思っている。

**○報告事項１　「牛乳に起因する集団食中毒の対応」について**

学校保健課長から、牛乳に起因する集団食中毒の概要や牛乳提供再開に向けた今後の取り組みについて説明を行った。

**○意見交換**

【藤井委員】

どうしても、牛乳は管理をしっかりしなければならない。検食は病院でもやっているが、学校でも比較的しっかりされているのではないかと思う。３０分前には検食する等、検食体制というのはしっかりされているとは思うが、９月中は検食体制の強化月間のようなものを設けたほうがいいのではいか。

【宮口教育長】

これについては、毎日大きなもので作っているので、そこから取った給食を校長が毎日３０分以上前に食事をして、何か異常があれば、子どもが食べる頃には発症するというタイムラグ、時間を取って毎日行っている。

あわせて、その日の食材については全部保存しておいて、何かあった場合には検査できるという体制もきちんと取っている。

校長が出張等でいない場合は、教頭や管理職等が食べるという体制もしっかりできている。御心配な向きもあると思うので、併せてそういったことを再度周知しておきたい。

【藤井委員】

そのような体制を、きちんととっていることを丁寧に説明していただければと思う。

【藤井市長】

大変活発な御意見をいただき、教育委員会はもとより、市長部局にとっても大変有意義な会議になったと思う。皆さんに感謝を申し上げる。

**○閉　会**